

# 幼児教育分野 講師質問コース 回答

この度は、本研修をご受講いただきありがとうございました。

受講期間中に「令和5年度保育士等キャリアアップ研修 幼児教育 講師への質問受付コース」にて、ご質問いただいた内容について、担当講師からの回答を共有いたします。今後の実践に活かしていただけると幸いです。

なお、質問を多数いただいたため、多くあった質問を中心に回答しております。ご了承のほどよろしく願います。

※講師回答時期：令和6年2月中旬

Q …… 全国で本研修を受講された受講者からの質問内容

A …… 質問に対しての講師からの回答

(担当講師：九州産業大学 人間科学部 子ども教育学科 教授 鐘ヶ江 淳一 氏)

## 幼児との関わり

Q 私は、年中クラスをもっているのですが、運動会の課題で登り棒がありまったく登れない子がいて運動会の後も登り棒を取り組んでいます。わずかながらできるようにはなったのですが、あと一歩のところであきらめてしまいます。私としてはもう少し時間をかけたいと思っているのですが、発表会の時期に突入し悩んでいます。このように園で決められている課題を全員が達成しなければいけないのでしょうか？

A 年中クラスの頃は、多くの基本的な動きを習得し、縄跳び、鉄棒、跳び箱、ジャングルジム、竹馬、そして、登り棒などの遊具を使ったダイナミックな体の動きを楽しめる子どもも現れます。こうした遊びに対して「上手な・できる自分でありたい」（理想の自分）という欲求・願望が強くなる一方で、もしかしたら「下手な・できないかもしれない」（現実の自分）という不安や葛藤との間で揺れ動きながら前に進んでいこうとしています。したがって、積極的にチャレンジする時もあるれば、尻込みしたり戸惑ったりする日もあります。子どもたちは様々な力を直線的に獲得していくわけではありません。一見、後退しているように見える時、それは一度下がって次の段階に上がるためのエネルギーを貯め込んでいるのかもしれない。こうした二つの自分の間を行きつ戻りつしながら前に進んでいくことが幼児期の発達の特徴だと言えます。

運動会では、園児募集などの園側の大人の事情が優先され、できた時の見栄えがいい、保護者受けがいい技・運動が選択されがちです。そうした意味で、「運動会までに〇〇ができるようにがんばろう」と大人が決める取り組みだけでなく、子どもたちが自分のペースで友だちや先生と一緒に遊ぶことを通して経験できることもあるはず。子どもが自らやりたいことを選択する、やりたくなったら挑戦するというスタンスで関わってみてはいかがでしょうか。さらに、そうしたことを同僚、保護者に伝えながら連携・協力を図っていくことも重要です。運動会の種目選択など、園の方針をすぐに変えることはできないかもしれませんが、こうしたことを根気強く積み重ねていくことが大事だと思います。

Q 子ども一人ひとりを見てみると気づきが多いが、全体で見ると子どもの行動を理解できなかつたり、一人ひとりに寄り添えなくなったりするので、その時はどうしたら良いのでしょうか？

A 幼児期後半は、子どもたちが自分たちで集団遊びを展開できるようになります。保育者は、子どもの発達過程を理解し、個々の子どもの実態を踏まえながら集団づくりを行うことが重要になります。その際、個々の子どもにも焦点を当てた気づきは自らの保育のあり方を考える上で大事なことです。ぜひ、そうした気づきを文字記録として残していく（見える化）よう心がけてください。時系列に沿って子どもの育ちの経過を考察したり、外面的な言動だけでなく内面を読み取ったりすることによって子どもの育ちを見る目、子どもの良さを発見する目を磨くことができると思います。さらに、注目した子どもと他の子どもとの関わり、集団での子どもの立ち回り方（相互作用）との関連に考察を拡げてみてはいかがでしょうか。

2024年4月から4、5歳児の保育士の配置基準が「25人に1人」に見直されることになりました。一步前進だと思いますが、一人ひとりに寄り添った保育を実現するためにもさらなる改善を求めていくことが大切だと思います。

Q

園の子ども達が、生き生きと過ごせる働きかけを目指していきたいと思いますが、生活や遊びとは切り離された算数教室や英語の時間も、長年、園の取り組みとして続けられています。4歳児や5歳児に、小学生のように鉛筆で書かせることや算数等の勉強することに対して、先生の意見をお伺いしたいです。

A

子どもたちを机の前に座らせて文字や計算を教え、ドリルとして積み重ねていけば、同じ単元の、似た形式の同じ内容を問うテストでは正答率が高まるかもしれません。しかし、ちょっと質問の形式や問題の状況が変わったりすると応用が利かなくなり、解けなくなるように思います。2017年以降の幼児教育から大学までの教育の質を確保しようとする教育改革では、思考力（学んだことを使いこなす力）、問題解決能力（問題解決を成し遂げる力）を育むことが強調されています。

子どもに「させる」という姿勢で教えていくと、子どもは本来持っている興味や好奇心を失ってしまいます。自分で工夫した時、発見した時のワクワクする気持ちを感じることができないため、自ら考えて学ぶ意欲を削ぎ落していくように思います。そうした意味で、遊びの中で五感をフルに活用し、友だちや大人とたくさんコミュニケーションを取りながら「生き生きと過ごす」ことが大切だと思います。

Q

私は今まで自分のペースで保育をしてしまっていたので、子どもの時間軸に合わせて保育をしたいと思っています。しかし、行動に移すのが遅く、気分の波の激しい子に対して、どういう声掛けをするとやる気を出して参加してくれるかが分からず、悩んでいます。どういう声かけをすればいいのか教えてほしいです。

Q

子どもの情緒についてご質問いたします。家庭環境の変化から担当保育士に自分だけを見てほしい。もっと構ってほしい。と言う気持ちから癇癢を起こしたり保育士を見ながらわざと壁を蹴ったりする子がいます。保護者とも面談を行っていますが気持ちにムラがありどう対応すれば良いのか（愛情表現はしているつもりですが足りないのか、もっと伝えた方がいいのか）対応を試行錯誤しておりますがなかなか改善されません。ご助言頂けたらと思います。

A

「やりたくない」や「やらない」といった言動によって、つついその子を否定的、または消極的な姿と捉えがちです。

しかし、そうした言葉には、「〇〇したい」と同価値とも言えるその子なりの意思や願い、要求があると考えする必要があります。子どもの内面を理解すること、それを受けとめる（受容する）ことが重要だと言われる。この意思や願い、要求といった自分の内にあるものが理解され、わかってもらえた、自分が認めてもらえたという経験が大事だと思います。それが子ども自身の「安心感」と「自己肯定感」となり、さらには仲間や大人への「信頼」に繋がります。主体的な活動が行われるためには、その前提として、子ども自身が周りから受けとめられ理解されている「安心感」と、自分は自分でいいんだという「自己肯定感」を、子ども自身が感じている経験が必要です。

Q

私が小学校訪問へ行った際、解き方が分からなくても、分からないこと自体を伝えられない子どもが多くいました。困っている子どもは園では気づきやすいが小学校では難しいのかなと感じました。分からないと小学校への楽しみも薄れていくと思いました。幼児教育の段階で困っていることを自ら伝えられるよう関わることも必要だと思い、意識して関わっているのですが、それ以外に何かできることはありますか？

A

子どもたちが「わからない」「できない」「困った」ことを言えるかどうかという個人的な問題に加え、そうした言動をする環境が用意されているかということも考える必要があります。保育所や幼稚園ではそうしたことが言える雰囲気、友だちや保育者との関係性があつたが、小学校はどうなのか？こうしたことについて、小学校訪問後の協議会のテーマにしてもいいように思います。「わからない」「できない」「困った」発言が主役となる、深まっていく保育や授業について幼保一小的双方から語り合ってみたいものです。

## 幼児教育の環境・保育内容

Q

戸外あそびを多く取り入れたいが、年々気温も上がり、子ども達も暑さに慣れておらず、すぐ疲れてしまう。暑い日などは室内だけで運動あそびを取り入れてもいいですか？又、暑さに強くなる為には日頃からどのような工夫が必要ですか？

A

子どもは体温調節機能が未発達なことに加え、体重当たりの対表面積が大人より大きく、炎天下では体の深部体温が上がりやすいと言われていてます。また、身長が低く地面からの照り返しも受けやすいので夏バテや熱中症に気を付けなければなりません。しかし、一日中冷房の部屋にいるのも体温調節を司る自律神経の発達を考えると好ましくありません。安全が確保できる時間帯や場所を見つけて30分でも1時間でも外に出て、汗が出やすい体づくりを心がけると良いでしょう。急激に気温が上がると、汗を出す「汗腺」が十分に機能せず、汗が出にくくなります。暑い時期に十分な汗をかくには、本格的に暑くなる前から適度な運動で汗を流す習慣をつけておくことが大切です。また、自律神経を整えるには十分な睡眠や食事をとり、規則正しい生活をするのが大切です。

Q

遊びが危ないと制限がかかる中、子どもの遊びに行かせるのがなかなか難しいです。自由に遊ばせる為にはどうすれば良いですか？

Q

運動を十分に出来る環境が整わないため運動面での子どもの発達がとても心配になります。また、運動面が発達しないため怪我也多く困っています。何かいい方法はないかと日頃から考えております。良いアドバイスがあればお願いいたします。

A

できないこと、苦手なことでも頑張って、工夫して取り組むような経験が子どもにとっては大きな意味を持ちます。しかし、面白くて楽しそうだけれど、どうしたらいいかわからないというのでは子どもは嫌になってしまいます。

そこでは、保育者が必要に応じて手を貸しながら少しずつ自信をつけられるようにしたり、得意な子どもがコツを教えたり、励ますような環境をつくるのが大切です。「やれそうだ」という見通しが与えられ納得さえすれば、もともとあった「やりたい」「上手になりたい」という気持ちに加え、そのためにはどうしたらいいかも考えるようになり、目標を立てて練習を重ねていくようになります。このような認識に支えられて、自分の変化の見通しを確かなものにするには、「今は上手いかわなくても、工夫や努力をすれば何とかできる」という自分への信頼感を高めていくこととなります。こうした自己肯定感は就学までに培っていききたいものの一つと言えます。

わくわく・ドキドキ感をもたらす遊びで、子どもたちは、いつも成功するとは限らず、時には失敗することもあります。こうした遊びの価値とは関係のないところで生じる危険性（ハザード）、例えば、事前の遊具の点検など、については、保育者の責務として未然に防ぐことが必要です。子どもたちは、そうした遊びの中での失敗の経験から、次は失敗しない、けがをしないように工夫することを学んでいます。かつては、遊び・生活の中で自然に育まれてきた自分の身体を思い通りに動かす力を意図的・計画的な保育活動の中で保障するという観点で、今後はますます求められるように思います。その際、こうした子どもの発達や遊びに込めた思いを職場の保育者集団間で合意するだけでなく、保護者にもそうした遊び・体験の意義を伝えながら連携・協力を図っていくことも必要です。

Q

ジャンケンのことについてたくさんジャンケンを取り入れた遊びをおっしゃっていましたが、遊びを展開するときにはどのようなものを参考にしていますか？

A

子どもの発達段階を考慮しながら遊びを考えることが大切です。ジャンケンの意味（勝ち負け）が理解できない3歳以下の段階とそれ以降では、子どもが楽しめる遊びの内容が異なります。3歳以下は、「ジャンケンポン」の掛け声と動作と一緒にやる、大人や年長児と一緒に楽しむ段階と言えます。勝敗・競争意識が高まってくる4歳以降は、「勝ったら〇〇する、負けたら●●する」といった因果関係も理解できるようになります。初めは大人が示したルールを守って遊ぶ、その後は自分たちでつくったルールで遊ぶという流れをつくってみてはいかがでしょうか。また、手だけでなく、口（くち）ジャンケン、腕ジャンケン、足ジャンケン、全身ジャンケンと、ジャンケンのやり方を変えるだけでも、遊びのバリエーションが広がっていきます。

Q

小規模の園で、1つの空間で0歳から5歳までの子どもがいる場合、それぞれの年齢が成長出来るようにしていく為には保育内容はこういった工夫をしていく必要がありますか？

Q

縦割り教育・保育についてはあまり触れられていなかったように感じましたが、幼児教育の中で縦割り教育・保育を取り入れるならば、どのような活動から行っていけばよいでしょうか？

A

同年齢保育では、子どもの発達に近いことから一斉保育で〇歳児用の保育を行いがちです。しかし、それを「やらない子」や「できない子」が必ず出てきます。保育者はその「できない」が気になり「できる」まで取り組ませようとしますが、うまくいかないことも多いものです。その結果、「しない」「できない」を否定的に見てしまい、大人の意図を優先した課題克服型の「させる」保育になってしまい、子どもを追いつめるような保育に行き詰まり感を感じてしまうこととなります。そうした中で、縦割り保育（異年齢保育）が広がりを見せつつあるようです。学校のような時間に区切られた意図性のある保育ではなく、家庭のような生活の必然性に根ざした「幅（ゆとり）」のある保育をめざしてはいかがでしょうか。短時間で何かを教え込むのではなく、安心できる場であることを大切にしたいものです。生活時間にも幅を持たせ、時間できちっと切り替えるのではなく、時間的余裕（幅）を設けます。そうした中で、子どもは余裕を持って安心して遊び込み、自分の気持ちに折り合いをつけ切り替えられる「間」を持てるようになり、保育者も時間に追い立てられずゆったりと関わられるように思います。

Q

幼児期の発達段階に合わせた遊びが沢山載っているようなおすすめの本があれば、教えてほしいです。保育書類が書きやすくなるような、おすすめな参考本があれば教えてほしいです。

A

万能薬のような書籍はありません。書店の書棚から、ネット情報から、自分で探し出したものを参考にした方が保育者としての力量が高まるように思います。

Q

最近保育現場では、求められるもの・ことが多く、現場の保育士は疲弊しているように感じます。10の姿もあまり出来ていないような気持ちになりました。今回、対保育士の数の見直しと処遇改善について、少しお話しはありましたが、では実際に、対保育士の数の理想とする人数などがあれば（3～5歳児、横割り保育と縦割り保育時）先生なりの意見を詳しくお聞きしてみたいです。対保育士の数が見直されれば、今よりも質の高い保育が提供できるのではないかと考えています。

A

2025年4月からの4、5歳児クラスの保育士配置基準見直しは、各地での保育事故、不適切保育が相次いだことが要因の一つとなっています。今回の見直しは一步前進だと言えますが、とくに、5歳児クラスは、保育要録の作成など小学校との連携に関わった大切な仕事があります。こうした実態を踏まえ、保育所保育指針に書かれていることができる保育条件の見直しを求めていくことが大切だと思います。そこでは、職員配置基準だけでなく、子どもの面積基準や職員の処遇改善（給与の改善や勤務時間内の教材研究の時間確保など）といったことについて具体化を求めていくことが必要だと考えています。



## 職員間の情報共有・連携

Q

第4章の評価の理解及び取組の部分で、職員間での対話による情報や理解の共有とありますが、なかなか対話するという時間が取れずに、共有できていないこともあります。他園で、風通しの良い、職場作りのために実践されていることがあれば、参考にしたいです。

Q

職場の共通理解を深めるには、コミュニケーションが必要だと思うのですが、自分は保育中どのタイミングで話せばよいか分からなかったり、子どもと接しているときに、伝えたい内容を頭の中でまとめるのが苦手です。そういう場合どんな方法で職員と理解を深めればよいのですか？

A

保育時間が長くなるにつれ、シフトも複雑になり、職員全員が顔を合わせる機会が減少しています。そうした中で自園の状況に合わせて柔軟に話し合いの場や時間の確保を工夫することが求められます。準備作業中に雑談しながら子どもの様子を共有することから始めたり、定例の会議で10分間は子どもの様子を「次に向かう姿」として語り合う時間を設ける、毎日定例の「10分間ミーティング」でテーマを決めて話し合うなど、短時間でも日常的につくり出すことを意識することが必要だと思います。また、「相手の意見を否定しない」「発言者が偏らないようにする」などの基本ルールを確認したり、「何が（誰が）いけなかったのか」を追及するのではなく、次に向けて「何が必要か」「どうすべきか」について、各自が我がこととして発言するという共通認識をもち、意見を交わしやすい環境をつくること対話の充実を図ることにつながります。

## 幼保小の連携

Q

近年ICT化を進める保育業界ですが小幼保の連携において活用されている、活用を検討しているシステムなどはありますか？

A

コロナ前までの保育所、幼稚園では業務管理上の負担軽減の観点から ICT 活用が試みられていました。コロナ以降は、「幼児期は直接的・具体的な体験が重要であることを踏まえ、ICT等の特性や使用方法等を考慮した上で、幼児の直接的・具体的な体験を更に豊かにするための工夫をしながら活用する」ことが求められている。（文部科学省；2021、『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）』との認識に立った構想が展開されています。神戸大学が文部科学省の委託を受けた調査研究（「これからの幼児教育とICTの活用」[https://www.mext.go.jp/content/20200525-mxt\\_youji-000004222\\_12.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200525-mxt_youji-000004222_12.pdf)）などがその一例です。幼保一小連携でのICT活用の事例は、それほど多くないのが現状です。実体験を補う一手段として取り入れることにより、新たな幼保小の連携が展開が期待できるのか、興味があるところです。

Q

企業主導型保育園で小学校との連携がなかなかできない状況なのですが、こういった形で連携をとれば良いかアドバイスを頂きたいです。

A

企業主導型保育事業の実施状況（こども家庭庁、「令和4年度企業型保育事業の実施状況について」,2023.）によれば、定員20人未満の園が68.9%、4歳以上の在園児の割合が14.6%と、比較的小規模の園が多いと言えます。こうした状況を踏まえれば、個別対応で小学校との連携を考えるのが現実的だと思います。保育要録の送付に際し、当該児の育ちの状況について補足説明の場を確保することに努めてはいかがでしょうか。ベネッセ教育総合研究所の調査（「第3回幼児教育・保育についての基本調査」,2019.）によれば、公立保育所・幼稚園に比べ、私立の方が「内容について補足説明する場がない」と回答した割合が高いという結果が出ています。しかし、7割くらいの園ではそうした場が用意されています。当該児の最善の利益という観点からそうした場について小学校との連携を図ってもらえればと思います。

Q 保育園と小学校との連携はとても大事だと実感しているのですが、小学校の先生方とお話しする時になかなかスムーズに話が進まず、小学校の授業を受けれるか受けれないかの秤で子どもの話を進める傾向を感じます。カリキュラムが違う事を私たちもしっかり学ぶのも大事と思いますが、子どもたちが小学校での生活が少しでもスムーズにいくように、どのように小学校の先生に子どもの姿を伝えればいいのか悩みます。

Q 小学校との接続・連携において、どのような取り組みがあれば、より子どもたちの育ちを支え、継続した教育などを行うことができるのでしょうか？また、スタートカリキュラムについて、もっと詳しく教えていただきたいです。

Q 私は、みんなと同じ事をするのが当たり前のように教わってきた気がします。制作もお手本がないと出来なかったり、何をしても早くした方が凄いとされました。今回研修を受けて、早い子も凄けれど、遅い子は丁寧にしている…と受け止めれば、その子も凄いです。お手本の通りに描けた子は、よく見て描けたね！でも、お手本と全く違う子は創造性豊かで素晴らしい。そういう事が大事なんだと分かりましたが、学校は・・・それで大丈夫？ゆっくりして大丈夫？時間割があって、時間内にみんなと同じ事をするのでは？と疑問に思います。学校と保育園の接続と言うが、根本的な所が違うので接続というのは難しいのではないかと、少しわからなくなりました。

A 小学校には、小学校っぽいことを保育所や幼稚園で先取りすることが幼保一小的接続であり、それが子どもたちのためになると考えている先生もいます。保育所や幼稚園は小学校の予備校はありませんし、小学校の授業に役立てるために幼児教育があるわけでもありません。子どもの育ちの連続性を考えた時、保幼一小的接続は、次に困らないようにするための接続ではなく、今の育ち（幼児期の遊びの中の育ち）を次（小学校）も理解し、さらに伸ばすための接続ということになります。

今までの幼保一小的の連携の場面では話がかみ合わない場面も多々ありましたが、少しずつ状況は変わっています。幼児教育の3法令と同様に、「小学校学習指導要領」が改訂されました。改訂のポイントの一つが「学校段階等間の接続」です。幼保一小と同様に、小一中、中一高へと一貫して資質・能力を育てていくために、それぞれの接続を円滑にすることが強調されています。つまり、幼児期は、その基礎を築くとても大切な時期なのです。そして小学校では、幼児教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて、子どもが主体的に自己発揮できる環境を整えていくことが求められています。

幼児期の子どもたちの資質・能力が十分に育まれていることを前提に、幼児教育からの連続性や一貫性を大切にしながら小学校入門期のカリキュラムを、「スタートカリキュラム」と呼びます。「小学校学習指導要領解説」には、「幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう」にスタートカリキュラムを編成するようにと書かれています。幼児教育に求められるのは、平仮名や計算、英語の学習などをする小学校の前倒し指導ではなく、これまで通り幼児教育において大切にされてきた、子どもたちの自発的な遊びを通じた指導なのです。

Q 現在の5歳児年長クラスでは、道徳性がなかなか身につかず、相手への思いやりがなく、言動が激しい園児が数名います。子ども達同士の間立ち、何がいけなかったのかなど聞く時間や空間を持っていますが、なかなか変化が見られません。保育士もどのように伝えていくべきか、またあと半年で小学校に上がる為、小学校への連携としてどのように伝えていけばいいのか迷っています。

A 「小学校での学習になるべく早く適応するために」という価値観が優先し、大人の思い通りになる「いい子」であることが求められるようにも思われます。思いっきり遊びこむことよりも園での様々な習い事や行事の充実を要望する保護者の声も強いことも事実です。小学校の説明会で配られるパンフレットには、「座って、人の話を聞けますか？」「名前がひらがなで書けますか」「思ったことが言えますか」などの言葉が並んでいます。小学校の教室での学習や、学習に必要な学習規律の形成は、幼児期の身体と心を精一杯使って遊び込む中で育てられた知的好奇心や集団的な遊びや活動でのルールづくりなど、子どもの力を土台として行われる必要があります。ベネッセ教育総合研究所（2016）の調査によれば、「遊び込む経験」（協同的な活動、自由に遊べる環境など）が多い子どもの方が「学びに向かう力」（強調性、好奇心、自己主張など）が高いことが示唆されています。

家庭や保育所・幼稚園での生活の中で私たち大人は、子どもたちを「いい子」にしようという思いのあまり、「汚しちゃダメ！」「危ない！」「うるさい！」「早く！」「下手ねえ・・・」と「禁止」や「抑制」を強いてしまいがちです。「抑制」を強いるのではなく、身体感覚を伴って複合的に実感できるあそびをじっくり、たっぷり積み重ねていくことが重要です。大切なのは、その時点で子どもたちが経験していること、感じ取っていることに共感しながら励ましてあげることだと思います。保育者だけでなく、保護者、地域の人たちと手を結んであそび文化を継承し、あそび環境を豊かにしていくために知恵を出し合うことが求められているように思います。

Q

アプローチカリキュラムについて質問です。具体的に、時期や立て方など教えていただけますか。

A

アプローチ期、幼児教育の最終段階である5歳期の後期（10～3月）における教育課程のことをアプローチカリキュラムと呼んでいます。それは目新しいものではなく、5領域を総合的に学んでいく教育課程です。学ぶということを意識しているわけではありませんが、以下のような遊びの中での学びの芽生えを育てていくことになります。①楽しいことや好きなことに集中することを通して、様々なことを学んでいく、②遊びを中心として、頭も心も体も動かして様々な対象と直接関わりながら、総合的に学んでいく、③日常生活の中で、様々な言葉や非言語によるコミュニケーションによって他者と関わり合う。

特別な計画の立て方があるわけではありません。今まで通りの計画を際に、①「ねらい」と「10の姿」を関連付ける（「芋ほり」だと⑦自然との関わり・生命尊重など）、②小学校教育とのつながり（「お店屋さんごっこ」だとお金や品物を数えたり、比べたりする活動は算数など）の考察を付け加えることが、小学校以降の「自覚的な学び」との接続につながっていくことになります。

## 指導計画・記録

Q

私の勤務する保育施設の自治体では、保育者の書類の負担を減らすということで、全体の計画、もしくは、月案を作成しなくても大丈夫になりました。令和5年10月より、現在勤務している園では、月案を省く形になりましたが、その際に、全体の計画から週案を作成するように指示がありました。その場合は、どのような内容をふまえて作成したらよいのでしょうか。月案で作成していたねらいを週案の中に入れ込む形で作成していますが、具体的にどのような内容がきちんと記入できていたら良いのか、教えていただきたいです。

A

指導計画は「全体的な計画」を基に、年間計画>月案>週案>日案の順に、より具体的に「子どもの姿・保育者の援助」を記載することがポイントです。「月案」を省略ということであれば、「月案」を計画する際に考慮すべきことを「週案」に落とし込むことが必要になります。「月案」を作成する際には、①年間計画に基づき具体的に作成すること、②前月末の子どもの成長や発達を踏まえて設定すること、③季節や行事を考慮することが求められます。ここでは、週案作成時の子どもがどのようなことに興味や関心を持っているのか、どのようにして遊んだり生活しているのかといった実態（子どもの現在(いま)）をどう捉えたのか、という保育者として専門性が試されます。

指導計画は作成して終了ではなく、その計画を共有し保育に反映させることが大切です。さらに、立てた計画についての自己評価や保育士同士の反省を行うことで、保育の質を向上させることができます。「月案」を省略しても、月レベルでの振り返りはクラス単位、年齢単位で行った方がいいように思います。